

蒼空高く翔らむと

(昭和二年寮歌)

土井恒喜君 作歌
長谷川吉郎君 作曲

一

蒼空高く翔らむと
暫しやすらふ楡の蔭
力は胸に溢れつつ
翼つくろふ思かな

四

若きに芽ぐむ数々の
深き苦悩は身にあれど
迪を恵ねて辿りゆく
遊子の真意君知るや

七

花咲き散りて五十年
寮庭の桂も年ふりぬ
先人の影とほけれど
遺訓や永久に薫るらん

二

朝曠野の露を吸ひ
夕北斗の曙きに
驚き瞪る幼鵬の
清き眸 君見すや

五

茫々千里石狩の
野は澄みわたる銀の
雪さんらんと散るところ
われらが魂の故郷かな

八

北溟城の生活に
桜と星の旗かざし
相寄りむすぶ三百の
志は高きわれらかな

十

ああ碧落に永劫の
北斗の光かげさえて
清き三年の思出の
銀觴の酒つきざらん

三

うら若き日の悦びを
はかなきものと誰かいふ
理想の潮湧き出づる
生命の海の高鳴るを

六

若き勇者よオキクルミ
熊をはふりて饗宴せし
短檠すでに光消え
東の空はかぎろひぬ

九

こよひ手稲に日は落ちて
新月細くかがやけば
青き煙のそが中に
ほがらかになる楡の鐘